
障害児のきょうだいへの理解

授業での児童文学の活用

関谷 眞澄

Understanding for Handicapped child's Brother/Sister

The Teaching that Using of Juvenile Literature

Masumi SEKIYA

キーワード：障害児の家族、児童文学

1 問題と目的

近年、障害児者／児への理解は進み、ノーマライゼーションの理念を基にインクルージョンの思想へと発展し、統合保育やインクルーシブ保育へと在り方もより「ともに生きる」という視点が明確になっている。また「特別支援」という観点から、障害児にかかわらず、援助の必要なこども達への援助が保育や教育にかかわるものに求められている。

「障害児保育」もしくは「特別支援教育」という科目において、障害特性の理解と家族への支援のあり方を学び、実践に生かす姿勢と能力（知識や技能）を身につけていくことは欠かせないものである。それは学生である期間だけでは身につくものではないが、少なくとも基本的な知識を身につけると卒業後にも自己研鑽していこうとする意識をもつようになることが、授業の目的となるだろう。

障害児の家族への援助において、その家族、親や兄弟姉妹の心情に立つことができないと、表面的な支援にしかならない。他者の心情に近づくには、その声を聞き、その感情に触れることが肝要である。それには想像力と感性、客観的な見方（中立性）が必要となる。

「物語」には自分とは異なる世界やその登場人物の気持ちを疑似体験させる力がある。その力を活用し、障害児の家族の心情を考え、自分なりに捉えていくことが、授業の方法のひとつとして考えられる。

筆者は障害児を抱える子の同胞（以下、「きょうだい」と表記する）の心情を理解することを「障害児保育」の重要なテーマとして、学生に講義をしている。そのなかで、丘修三の児童文学作品「ぼくのお姉さん」（『ぼくのお姉さん』2002年のなかの一編）を題材とし、きょうだいの心理と家族の心情を学生それぞれが自分がその立場に立ち考えるという試みをしている。

表面的な言葉での理解ではなく、実感を伴った理解のために必児童文学書がどのような意味を果たすか、また学生がその物語（ストーリー）からどのような理解を示すかを検討するため、「障害の理解へのアプローチ 児童文学作品を活用しての授業」（『千葉敬愛短期大学紀要』第40号 2018）を執筆した。ここでは、丘修三の「ぼくのお姉さん」を用い、学生が主人公の「ぼく」となって、“ぼくのお姉さんは、障害者です。”の続きを綴った「作文」をもとに、学生たちが「ぼく」の姉に対する心情がある日のできごとによって、どのように変化したと捉えたかや内容、理解登場人物の心情などの理解の深さを分析した。また「障害児のきょうだいの不安とストレス」（『千葉敬愛短期大学紀要』第36号 2014）では障害児のきょう

うだいの不安とストレスを整理し、論じた。

児童文学作品を活用するには、その作品に込められた現実と主張を理解する（物語を読み取る）ことができないと意味を失う。児童文学作品をより深く理解するために活用できるものや方法は何かを探っていくことが必要である。

2 目 的

本稿では、障害児のきょうだいの心情を描いた物語の読み取りにワークシートがどのような効果をもつかを検討していく。

採り上げる作品は、丘修三の「ぼくのお姉さん」（『ぼくのお姉さん』偕成社 2002）である。

3 題材「ぼくのお姉さん」

1) 「ぼくのお姉さん」の位置づけ

「ぼくのお姉さん」は、丘修三の短編集『ぼくのお姉さん』の一編である（『ぼくのお姉さん』p19～p33）。ダウン症の姉をもつ「ぼく」の「お姉さん」に対する葛藤や気持ちの変化をひとり語りで描いている。

授業の重要な目的のひとつとして、「障害特性の理解と保育での援助」を掲げている。その始めとして「知的障害」を取り上げ講義している。その最後に「ぼくのお姉さん」を用い、「ぼく」の心情を「作文」として書くことを課題とした。

ダウン症についての理解を深める意味でもこの短編は有意義である。講義でダウン症の発症要因や障害特性を説明しているので、「言葉」や「概念」としては理解ある程度していると思われる。そのうえでこの物語を読むことで、その姿が具体的にイメージされるのではないだろうか。またダウン症やその家族の活動をテレビなどを通して見聞きしていることもある。授業ではダウン症者の声を採り上げた新聞記事（平成27年12月、朝日新聞「ダウン症の僕 不幸じゃない」）も活用した。

具体的にイメージできることで、ダウン症児の姿が身近なかつ現実的なものとなる。それは生きている存在として対象を捉えることにつながるのである。

また後期に採り上げる「きょうだい」の心情理解につながる題材でもあり、「家族への支援」というその位置づけも果たしている。

2) 「ぼくのお姉さん」ストーリーの概略

語り手である「ぼく」、正一は小学校5年生。会社員の父親と専業主婦の母親、17歳の姉の4人家族である。姉はダウン症で、この春支援学校を卒業し、4月から福祉作業所に通っている。

姉は発語が不明瞭で、「17歳になるというのに、満足にひらがなも読めないし、書くとなると、自分の名前くらいがやっとだ。数の計算はまるでだめだから、お金のつかいかたなんかもわからない。」（『ぼくのお姉さん』p14）。正一は姉のことを知ったともだちから、学校で姉のことを「チビ、デブ、ブスの3拍子」、「くるくるぱあ」とばかにされ、「おれにも、おまえのお姉ちゃん、みせてくれよ」言われ、姉がいない方がいいかと思ったり、いた方がいいかと思ったり、悩んでいた。そのため学校からの作文の宿題、自分のきょうだいのことを書くという課題がどうしても書けずにいた。

宿題が出た日の夕方、作業所から帰ってきた姉が夕食はレストランに行くと泣きわめいていた。理由のわからぬまま家族は行きつけのレストランに出かけた。料理が運ばれ、勘定書きがおかれた時にその理由がわかった。姉が福祉作業所で働いてもらった初めての給料袋を母親に差し出したのである。毎日9時から4時半まで働いてもらった3千円の給料で家族にごちそうしたかったのである。両親の嬉し涙、姉の嬉しそうな笑顔、一日中働いての賃金の少なさとそれを家族のために使いたかった姉の人柄。色々な思いをかかえて家に帰った正一は、宿題の作文の最初の1行を書き始めた。『ぼくのお姉さんは、障害

者です。』

ここでこの短編は終わっている。(学生たちにはこの続きを書くように指示した。)

4 方 法

1) 対象者

本校の2019年度2学年生、196名(調査実施時)。うち男子学生4名である。保育士、幼稚園教諭の資格取得を目指す学生たちである。

2) 実施時期と提示方法

主人公正一の作文の続きを書くことを課題として実施した(800字以上)。正一や両親の心情や家族関係、姉の障害や生活などを深く読み取るために、ワークシートを作成、配布した。作文を書く前にワークシートの記入をするよう指示した。

作文とワークシートは「知的障害児」の「障害特性と保育での援助」についての講義の終了後に実施した。この時期までに「保育とは」「障害児保育とは」「障害とは」という章立てで、保育の役割や障害構造などを講義し、考えさせてきている。

学生には「ぼくのお姉さん」の主人公正一の気持ちになって、作文の続きを書くこと、字数は800字以上(氏名、題名は除く)を指示した。事前に配布し各自が記入したワークシートを活用するよう説明した。

作文用の原稿用紙は筆者が用意した。ただしパソコンを使用したい学生には、20文字20行の設定で書き、配布した用紙にとめて提出するよう指示した。

3) 倫理的配慮

各クラスごとに研究として活用したい旨伝え、了解を得た。また筆者の用意し、配布した原稿用紙の左下に下記の文章で了解を確認した。

〈研究協力のおお願い〉

今後の授業に役立てるため、作文とワークシートを研究のデータとして使用させてもらいたいと思います。研究論文としてまとめる予定です。個人の名前が出ることはありません。また協力の有無によって不利益が生じることはありません。データとして使用することがだめな方は□に×を記入してください。よろしくお願いします。

4) 分析方法

学生の作文を下記のように分類する。

A：主人公の気持ちに立ってより深く理解していると感じられるもの

B：ストーリーの理解はできているが主人公や家族の内面への思索の浅いもの

C：捉え方にずれがあると思われるもの、またはストーリー展開に終始した表面的な内容のもの

分類後、AとCのグループごとにワークシートの書き込みがどのようなものであるか(量と内容)と作文を対応させる。そして作文のできばえとワークシートのできばえとの関連を検討していく。なおBはさらにB⁺、B、B⁻に区分した。

「より深く理解している」という基準は下記である。この基準は『千葉敬愛短期大学紀要』第40号での結果を参考にした。

またワークシートも、書かれている量(具体的)や内容(理解)により、A、B⁺、B、B⁻、Cに評定した。

より深い理解のみられる作文のポイントは以下である。

① 正一の「姉の障害」(姉が障害者ということ)への心情

姉の能力や外見の説明やそのことで友だちにからかわれる、姉のことを馬鹿にされるということだけで終わらず、

- ・「障害」「障害者」へのネガティブな感情に触れている。
- ・友だちにからかわれる、姉のことを馬鹿にされるつらさを明確に述べている。
- ・自分自身の偏見としても捉えている。

② 父、母の心情

障害をかかえる娘の初めての給料で家族にごちそうをしようという気持ちが嬉しいという、父と母の、心情だけでなく、

- ・喜びの所以について書いている。(障害を抱える我が子の成長への思い)(いままでの苦労と安心感)

③ レストランでのできごとの意味

「ぼく」が姉に対して「立派」「すごい」と思ったという文章だけでなく、

- ・姉を尊敬する、見直す、その理由や「ぼく」自身の価値観への影響などが詳しく述べられている。

④ 姉の初めての給料3千円の貴重さ

「初めての給料」ということだけでなく、

- ・姉がどれだけ働いて得た賃金であるか理解し、重みを感じている。

⑤ 学生の考え

- ・正一としてではあるが、学生自身のメッセージが書かれている。(ただし意見が作文の主になっていないこと)

Aの評定は①から⑤のすべてを踏まえていることが条件ではない。

なお『千葉敬愛短期大学紀要』第40号では163名の作文のなかで49名の作文により深い描写や書き手の理解の深さがみられた。

4 結果と考察

196名中、分析対象者は180名、うち男子4名である。研究協力の了解が得られなかったものが10名、未提出の者が2名、不備(ワークシート未提出)4名であった。

1) 結果

180名の作文を理解の深さで評定した結果は下記である。

A(主人公の気持ちや家族の気持ちを深く考え記述している)…9名

B(B⁺、B、B⁻)(ストーリーの理解の問題はなく、正一の気持ちの変化をまとめているが、正一の感動や障害への意識の変化、両親への思い、姉への「尊敬」に深くは触れられていない)…165名

C(捉え方にずれがあるもの、ストーリー展開に終始した表面的な内容のもの)…6名

(1) 共通理解されたこと

描写の細かさや巧みさ、文書力は様々であるが、ほとんどの学生が課題の意図を理解し、ストーリーの理解も問題なく、主人公の気持ちをまとめていた。

書かれていた内容は、姉の障害の程度や症状の説明、ともだちとの関係で嫌な思いをしたこと、姉のことで自慢できることはないと思っていたこと、姉の作業所での働く様子、レストランに行った日のこと、姉の優しさがわかり、姉への見方が変わり、自慢の姉と思えるようになったこと、などである。

C評定の作文はこの点が充分理解されていなかった。

(2) 作文評定Aの学生の作文

より深い理解のみられた9名作文を作文ごとに、評価される文章を抜き出して記載する。

文章の文字使いは学生の表記のままである。それぞれの作文には整理のためアからケまで番号をつけ

た。「」の後の①から⑤の表記は前述したより深い理解のみられる作文のポイントの番号である。

・アの作文

「両親はとても感動し涙を浮かべていました。お母さんはお姉さんが福祉作業所で働き始めた頃、家の仕事が全く手につかないくらい心配していました。しかし障害者であるお姉さんが紙の箱を折る仕事をし、1ヵ月の間一生懸命働いた初めてのお給料で家族みんなにごちそうしてくれました…中略…お金は足りないがそれだけで十分両親は幸せだったと感じました。」②

「障害者であるお姉さんが紙の箱を折る仕事をし、1ヵ月の間一生懸命働いた初めてのお給料で家族みんなにごちそうしてくれました。」④

「僕は今まで障害者に偏見を持っていましたが、それは大変失礼なことだと気づき、今は障害は個性だと思います。今後、障害者に出会い困っている様子だったら進んで助けたいと思うようにお姉さんのおかげでそのような気持ちになりました。」③⑤

・イの作文

(作文を)「なかなか書けずにいました。なぜなら、お姉さんは障害者で友達にはけなされるし、どこをとっても自慢できるところはないと思っていたからです。」①

「両親は普段から常にお姉さんの言葉や気持ちを受けとめ、尊重していますが、働くことに対して心配な気持ちも強くあったと思います。」②

「ぼくはこの出来事を通して、お姉さんの家族を想う素直なきもちを強く感じ、心から嬉しくなりました。」③

・ウの作文

「ぼくは今までお姉さんに対して自慢できることがありませんでした。正直恥ずかしいという思いもありました。しかし今回の出来事がきっかけで、お姉さんに対する考えが変わりました。」①

「お姉さんは、そこで毎日9時から4時半まで働いていました。そうしてもらった初めての給料で、ぼくたち家族にごちそうをしてくれたのです。もらった給料は決して多くはありませんでしたが、ぼくはとてもおいしくて楽しい食事になりました。」④

「障害者だからといって、なにもしないなどと偏見をもつことはよくない、同じ人間であり、もっと理解することが必要だと改めて気づかされました。」③⑤

・エの作文

「正直なことをいうと以前までは自慢するところなどないと姉をバカに思う自分がいて、クラスの間で姉が話題になった時には恥ずかしくて、泣き出しそうでした。この宿題が出た時も、どのように書けばいいのか、とても悩みました。」①

「障害を持ち、心配され続けてきた姉が自分の稼いだお金で家族を喜ばそうとしてくれたこと、それがなによりの幸せでした。」③

「もっと世の中が障害者に対する理解を深め、ともに生きる社会になってほしいという思いで、この作文を書きました。」⑤

・オの作文

「正直僕も友達にお姉ちゃんのことをばかにされた苦い思い出もあるから最初は作文に書くのがいやでした。」①

「お母さんやお父さんにとっては今まで色々心配しながら育ててきたこともありお姉ちゃんがこうして支払いをするという行動がなによりも言葉にならないくらい嬉しかったのだと思いました。」②

「お姉ちゃんは僕にとって自慢のお姉ちゃんであり優しい気持ちのもった人だと今は自身を持って言えるしみんなにも僕のお姉ちゃんのことを知ってもらいたいと思える存在になりました。」③

・カの作文

「そんなお姉さんのことをみんなに話すとからかわれたり、馬鹿にされたりして僕は嫌な気持ちになります。正直、この作文だって書きたくなくてたまりませんでした。」①

「お母さんと一緒に電車とバスの乗り継ぎの練習をして、1人で通えるようになりました。そこで一生懸命に働いたお給料で僕たち家族にご飯をご馳走しようと思っていたのです。お父さんもお母さんも涙が溢れそうでした。その時、僕はお姉さんが一生懸命に仕事をしている姿が頭に浮かんできました。」④

「僕はこの作文を通してみんなに伝えたいことがあります。それは、障害があるからといって普通に人とは違うと決めつけてはいけないということです。」⑤

・キの作文

「僕も友人にはあまりお姉さんと会ってはほしくありませんでした。僕のお姉さんは上手く言葉が出ず、小さい子どものような行動をするので友人に見られるのは恥ずかしいと思っていたからです。」①

「僕はお姉さんのことを誰かの助けがないと何もできない人だと勝手に思い込んでいました。ですが、お姉さんはお姉さんなりの考えをもっていて僕たち家族と関わっていることを知ることができました。」③

「僕はお姉さんにいつも何かしてあげているという気持ちでいましたが、お姉さんの笑顔と元気なところにいつも助けてもらっている、勇気づけてもらっているということに気づくことができました。」③

「今までは外見のことばかり気にしてしまっていたましたが外見よりも内面の方が大切と気が付くことができたので、よりお姉さんの内面を見て良いところを知っていこうと思います。」③

・クの作文

「ぼくは友達に自信を持って紹介できないお姉ちゃんに対してずっと恥ずかしい気持ちを持っていました。ぼくはお姉ちゃんがいなくて良いのか、考えてしまったことがありました。自分のお姉ちゃんに対してそう思う自分がぼくは嫌いでした。」①

「母のその涙はほんと一安心した涙、嬉し涙色々な感情が混ざっている涙なんだと感じました。」②

・ケの作文

「ぼくは正直なところ、お姉さんを友達に紹介したり、一緒にいると恥ずかしいと思ってしまいます。」①

「お姉さんがいて嫌なことばかりじゃないしひとりっ子は嫌だし、色々あってもやっぱりぼくはお姉さんがいた方がいいです。」①

「障害を持っているお姉さんだからこそ、ぼくたちに何が大切かを教えてくれるのだと思います。」③

「封筒から出てきたのは千円札がたったの3枚だったけど、あれだけ1日働いてこれっぽちかと思ったけど、初めてお姉さんが誇らしいと思いました。」④

(3) 作文評定Cの学生の作文

作文評定Cの6名の作文をコからソと表記する。それぞれの特徴は下記の様である。

いずれも作文評定Aの学生の作文に比べ、文章力や読解力の不十分さがみられた。

・コの作文

文字数は満たしているが、内容がもとの短編を全く踏まえていない。「お姉さん」がダウン症ということ、作業所に通っている、ということだけは書いているが、学生の創作で書かれ、課題の意図からははずれている。

・サの作文

文字数が不足。800字以上の指示に対し600字に満たない。できごとの記述も省略されており、主人公の葛藤や両親の気持ちなどにも触れていない。

・シの作文

文字数は800字を40字ほど超えている。短編に書かれた内容とは違うことが書かれている部分があり、主人公の気持ちの理解がずれてしまっている。主人公の姉に対する気持ちの理解もずれがある。否定的にとらえ過ぎている。肯定的な気持ちの記述がとらえられていない。両親への不満など主人公の気持ちを広げて考えている。

・スの作文

文字数は満たしている（900字弱）。内容は「ぼくのお姉さん」のストーリーに関係なく、知的障害のお姉さんの紹介をして、終わっている。

・セの作文

文字数が不足。800字以上の指示に対し600字を1、2行超える程度。「ぼくのお姉さん」の前半のストーリーはなぞっているが、テーマの重要部分となる後半は書かれていない。

・ソの作文

文字数は800字、ぎりぎりである。ですます調の文体で800字を超えた状態である。「ぼくのお姉さん」のストーリーに沿ってはいるが、主人公や両親の心情はあまり捉えれておらず、表面的な記述という印象が強い。

（４） 作文の評定A群とC群のワークシートの記述内容

作文の評定A群とC群のワークシートに見られる記述には下記のような特徴があった。

・記述の量において両群には大きな差がみられた。

A群では9の作文のうちオとケ以外の7の作文のワークシートは、ほとんどの項目に対し欄内に小さな字でびっしり書かれていた。

C群はほとんどの作文がいずれの項目においても1行で終わっていることが多かった。スとセの作文は一部詳しく書かれているが、A群ほどではない。ソの作文はワークシートが途中（項目5①まで）までで、残りは未記入であった。

・記述内容

A群は内容に理解のずれはなく、適切な記述であった。ストーリーとして描かれていることについての設問（設問1-①②，2-①②④，3，資料参照）には、本のなかの文章をうまくまとめ記述していた。「どう思いますか？」といったような学生自身の考えや感じたことを聞いた設問には、差がみられた。自分の考えや自分の言葉で述べられているかの違いが感じられた。特に両親の気持ちを推察しなくてはならない設問4は難しかったようである。理解はできているが、両親の行動の記述が主になっているものもあった。

C群は理解に大きなずれはないものの、表面的な記述であった。ストーリーとして描かれていることについての設問（設問1-②，2-④，3）でも本に書かれた内容の一部だけであったりした。また学生自身の考えや感じたことを聞いた設問には、「嬉しい」「とても不安」などの一文で終わっていることなど、表面的であった。「具体的に述べる」ということが充分ではなかった。両親の心情が理解できていないように思われる作文もみられた。

・文章力

A群とC群との文章力に明確な違いがみられた。

A群は主語、述語がはっきりしている文章であった。漢字も多く、間違いなく使われていた。

C群では箇条書きや、単語の羅列もみられた。また基本的な漢字の使用が少ない作文もあった。

・作文への反映

作文の評定Aの学生のワークシートはできごとを述べたり、ストーリー記述するうえで作文の内容に反映していた。ただ「心情」の記述においては充分生かされているとはいえない。

作文評定Cの学生のワークシートは記述内容の浅さはあるものの、設問にはずれなく記述していた。一つのワークシートを除いて、「ぼくのお姉さん」を終わりまで読んでいるだろうと思われる内容だった。しかし作文では終わりまで読んでいるのが疑問となる内容となった。作文とワークシートのできばえとの差が大きかった。ワークシートが反映されていないような印象を受ける作文の内容であった。この短編の理解の正確さがどのようなものかがつかみにくい。

2) 考 察

今回の調査、分析で下記の点が明らかになった。

① 作文の評定A群とC群を比較し、その違いを考えると、読解力と文章力の差が明確にあると考えられる。さらには課題への取り組み姿勢の真剣さの違いもあるだろう。

② 「ぼくのお姉さん」を取り上げ、主人公の作文の続きを書く、という課題を何年か前から続けてきているが、文書力は全体的にここ数年落ちてきているような印象を受ける。

今回全ての作文を読んで感じたことは、句読点の使い方の不適切さや、助詞や副詞の間違いの多さである。また段落変えが必要時にもなされていないものが少なくなかった。一文が長くなっている文章が多く、なかには加えて句読点のないまま、長文になっていることも多くみられた。

③ 作文を書くうえで、「ぼくのお姉さん」という短編の内容の理解と登場人物の心情の読み取りを深めるものとなることを狙い、ワークシートを作成し、作文と合わせて実施した。その効果を検討すると、以下の2点が言えよう。

- ・ストーリーを整理し、具体的に記述することには役立った。

- ・登場人物の心情の読み取りに役立ったかは個々人差がある。

心情に目を向けるきっかけや意識づけにはなったが、心情を感じ取るちからは個々人の読解力によるものとなり、そのちからを深めるには効果がなかった。

- ・主人公となり、作文を書くという意識づけには役立った。

4 今後の課題

前述したように、「保育とは」「障害児保育とは」「障害とは」という章立てで、保育の役割や障害構造などを講義した後に、「知的障害児」の「障害特性と保育での援助」についての講義の終了後に作文とワークシートを実施した。障害児の家族やきょうだいの心情や支援については、「障害特性と保育での援助」を終えてからの講義になる。作文を書く前に新聞記事などを用いて、ある程度触れてはいるが、イメージがしやすいように、もう少し事例等で具体的に講義をしていく必要があるのかもしれない。ワークシートの内容の検討もしていきたい。

■参考文献（五十音順）

- ・朝日新聞「ダウン症の僕 不幸じゃない」平成27年12月1日朝刊

- ・丘修三『ぼくのお姉さん』偕成社 2002

- ・白鳥めぐみ・諏訪智広・本間尚史『きょうだい—障害のある家族との道のり』中央法規出版 2010

- ・全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会編『きょうだいだって愛されたい—障害のある人が兄弟姉妹にということ』2006

- ・関谷眞澄「保護者・家庭への支援」青木豊編『障害児保育』一藝社 2012

- ・関谷眞澄「障害児のきょうだいの不安とストレス」『千葉敬愛短期大学紀要』第36号 2014

〈資料〉

「僕のお姉さん」の作文を書くにあたって使用したワークシートの設問を列挙する。実際にはA3版1枚の用紙である。

「ぼくのお姉さん」の内容を整理しよう。

1 ぼく — 主人公（語り手）について

- ① 名前（ ） 小学（ ）年生 （ ）才
- ② その日困っていたことは何か？
- ③ いままでお姉ちゃんをどう思っていたか
- ④ 僕はどんな性格だと思いますか？

2 お姉ちゃんの障害の状態や生活

- ① 名前（ ） （ ）才
- ② 障害の程度や特性
疾患名（ ）
障害の状況…話言葉、計算、読み書き、など（その他イメージできること、自由に）
- ③ お姉ちゃんはどんな性格だと思いますか？
- ④ 今通っている福祉作業について
 - ・いつから？（ ）
 - ・通うためにしたことは？
 - ・通っている福祉作業所の様子（わかる状況をできるだけ書き出してみよう）

3 お姉ちゃんはなぜレストランにいきたかったのか

4 お母さんとお父さんの気持ちを想像し、書いてみよう

- ① お母さんとお父さんはいままでどんな気持ちでお姉ちゃんを育ててきたでしょう？
- ② お姉ちゃんが福祉作業所で働くことになった時の気持ちや今の気持ち
- ③ お姉ちゃんから封筒を受け取った時の気持ち（p27を参考に）

5 ぼくの姉に対する気持ち

- ① 作文が書けなかったのはなぜ？
（p15～p20を参考に考えましょう）
- ② 友人を家に呼べないのはどうして？
（p1～p20を参考に考えましょう）
- ③ 僕は福祉作業所の様子やそこで働いているお姉ちゃんの姿を見てどう思ったか？
（あなたが感じたことを自由に）
- ④ レストランに行った後の気持ち

6 レストランで支払いをした時お姉ちゃんはどんな気持ちだったと思いますか？

＊『僕のお姉さん』（本全体）の主要テーマ

障害者と非障害者とが、どのようにかかわりあいながら生きていくか

＊作者の問題提示

障害者と非障害者との間でのコミュニケーションの困難さの指摘

コミュニケーションを成立させなくてはならないということの提示